

# 目次

## 鹿児島市

- 西洋へ追いつけ！ 近代化に託した日本の未来
- 世界遺産を訪ねて in 鹿児島市
- 斉彬ゆかりの鹿児島名物
- 鹿児島の恵み

## 屋久島

- 世界遺産を訪ねて in 屋久島
- 屋久島の自然に遊ぶ
- 屋久島の恵み

## 奄美大島

- 世界遺産を訪ねて in 奄美大島
- 金作原から足を延ばして
- 奄美の恵み
- 鹿児島で広がる サステナブルツーリズム

発行 鹿児島県 編集 月刊『江戸楽』編集部 発行年月 2024年1月





右/島津重豪肖像(鹿児島歴史・美術センター黎明館所蔵 玉里島津家資料所蔵) 上/重豪が設立した明時館周辺は現在、南九州最大の繁華街「天文館」となっている下/天文館のアーケードには、天を指す重豪の像が建てられている



# 鹿児島で出会う、

# 3つの世界遺産

「鹿児島」と聞いて、何を思い浮かべるだろう。雄大な自然や温泉、全国一に輝く黒牛や黒豚、明治維新を果たした薩摩藩や西郷隆盛という人もいるのでは。

九州本土から南西諸島まで南北六〇〇kmにわたる鹿児島県は、実は日本で最も多くの世界遺産を擁する県でもある。そして、三つの世界遺産を巡る旅は、絶景が広がる「自然」、食・工芸品などの「文化」、幕末の動乱を乗り越えた「歴史」と、鹿児島県の様々な横顔と出合わせてくれる。

本冊子では、二〇二三年に世界遺産登録三〇周年を迎えた屋久島や本土復帰七〇周年を数える奄美大島など、鹿児島県の世界遺産を紹介。ぜひ、旅行気分で見をめぐってほしい。

# 鹿児島市

世界史上稀にみる速さで近代化を遂げた、明治の日本。その先駆けとなったのが、幕末の薩摩藩であった。世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」の史跡を訪ね、日本の近代化の足音に耳を澄ませてみよう。

## 西洋へ追いつけ！

## 近代化に託した日本の未来

鹿児島市の近代の歴史はどのような歩みだったのだろうか。研究の第一人者・原口泉さんに話を聞いた。



志学館大学教授・鹿児島大学名誉教授 原口 泉さん

### ひ孫へと受け継がれた西洋への熱い眼差し

江戸幕府に衝撃を与えた黒船来航、そして明治維新を経て近代国家へと生まれ変わる中、日本の産業も変革の時期を迎えました。イギリスの産業革命

から遅れること百年、造船、製鉄、紡績といった洋式工業を、国を挙げて推進。西洋以外で初めて、極めて短期間に近代化を成し遂げていきます。この世界史上の快挙を伝える史跡の数々は二〇一五年には、世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」に

認定されています。全国八県十一市に点在する二三の構成遺産のうち、十六が九州に。そして、鹿児島市内の「旧集成館」「関吉の疎水溝」「寺山炭窯跡」(二〇一三年三月に石積み崩落し、同年十二月現在、復

# 世界遺産を訪ねて in 鹿児島市

明治日本の目覚ましい近代化の波は、薩摩から始まった。  
 島津斉彬が主導した集成館事業は、その後の日本の近代化へと繋がってゆく。

## A 仙巖園

万治元年(1658)、島津家19代・光久により別邸として築かれた。敷地に建つ屋敷や門は、歴代藩主たちにより増築や改築を重ねられ、薩摩藩の歴史に触れるには欠かせないスポット。奇岩の連なる中国の名勝・龍虎山仙巖に似ていることから名付けられたと伝わる。

鹿児島市吉野町 9700-1 TEL 099-247-1551 営 9:00 ~ 17:00  
 無休 senganen.jp



屋敷、庭園、奇岩…、様々な見所に溢れた敷地内。取材に訪れた11月は菊まつりの期間中で、園内随所を菊の花が飾っていた(例年11月1日~23日)

反射炉の建造は試行錯誤の連続であった。その際、斉彬は「西欧人も人なり、薩摩人もまた人なり」と藩士らを鼓舞したという



## 旧集成館反射炉跡

洋式工場群「集成館」の中核をなし、かつては薩摩焼の技術で造られた耐火レンガ製の高さ約20mに及ぶ巨大な炉が聳えていた。熱をドーム状の天井に反射させ、溶かした鉄で大砲を鑄造。国内に現存する3基の一つで、石組みのみが残る。



島津斉彬肖像(国立国会図書館蔵)。製鉄・造船・造船などの軍備面の近代化のみならず、紡績・ガラス・電信など、産業の育成にも力を入れた

旧時期は未定)では、幕末に興ったわが国初の産業革命の息吹と、倒幕を成し遂げた薩摩藩の国力を目の当たりにできます。

薩摩藩が本格的に西洋へと目を向けるきっかけを作ったのが、島津家二五代・島津重豪です。重豪は「日本一の蘭癖大名」と揶揄されるほど、洋学、蘭学に傾倒。天文研究の為に「明時館」(天文館)を創設し暦の精度向上を図った他、遠くヨーロッパの産業革命にも着目し、西洋の文化を自藩に取り入れようとしてきました。

## 列強から日本を守る 薩摩から産業革命を

長くアジアの覇者として君臨した中国がアヘン戦争で英国に敗れ、薩摩藩領でもあった琉球王国にも英国・フランスの軍艦が来航。黒船来航より9年早く武力を背景に「開国」を求められた斉彬の心にあったのは、このままでは日本が遠からず外国の植民地になるという危機感だったでしょう。

嘉永四年(一八五二)、四二歳で藩主となった斉彬は、造船・製鉄・電気・ガスといった産業を興し、富国強兵を図っていきます。幕府が洋式船建造を解禁すると、日本初の蒸気船「雲行丸」を建造。また、輸入に頼らず自国に紡績業を興す必要性を痛感した斉彬は、水車を動力とした紡績工場を築きます。そして、その跡を引き継いだ忠義は英国から優秀な技師を招聘し蒸気機関を導入。これが日本の産業革命の先駆けとなりました。こうした近代産業を集積した集成館は、さながら日本の中のヨーロッパのような場所であったこととでしょう。こうした薩摩藩の財政を支えたのが国内外との交易でした。薩摩藩では屋久島の屋久杉、奄美大島の黒砂糖の販売を独占。屋久杉は上方の大寺院等の建材となり、黒砂糖は上方で高値で販売されました。他方、刀剣や金・銀・錫・硫黄といった資源、蝦夷地の昆布などを輸出しました。

丸」を建造。また、輸入に頼らず自国に紡績業を興す必要性を痛感した斉彬は、水車を動力とした紡績工場を築きます。そして、その跡を引き継いだ忠義は英国から優秀な技師を招聘し蒸気機関を導入。これが日本の産業革命の先駆けとなりました。こうした近代産業を集積した集成館は、さながら日本の中のヨーロッパのような場所であったこととでしょう。こうした薩摩藩の財政を支えたのが国内外との交易でした。薩摩藩では屋久島の屋久杉、奄美大島の黒砂糖の販売を独占。屋久杉は上方の大寺院等の建材となり、黒砂糖は上方で高値で販売されました。他方、刀剣や金・銀・錫・硫黄といった資源、蝦夷地の昆布などを輸出しました。

殖産興業と対外貿易で得た資金や世界の情報は、斉彬が四九歳で亡くなった後も薩摩藩の国力を支えます。倒幕に向け、わずか一国で最新のミニエー銃数万挺を揃えられる藩など、薩摩藩以外にはありませんでした。重

## 薩摩を、日本を救う 近代化に懸けた想い

錦江湾と桜島、鹿児島島の雄大な自然を借景とする仙巖園。敷地面積は約5haと、大名庭園でも屈指の広さを誇る。藩主の別邸、そして島津家の迎賓館として用いられ、ロシア皇帝ニコライ二世やイギリス国王エドワード八世が訪れた他、幕末に島津家二八代・斉彬と勝海舟の会談もここで行われた。

斉彬は、自らが推進する近代化の為、敷地内に広がる竹林を切り開き、溶鉱炉や反射炉、造船所、ガラス工場等を建造。一帯を最新式の工場地帯へと変えてゆく。これらの工場群「集成館」は日本における産業革命の先駆けともなった。

とはいえ、西洋の文献を紐解き、手探りで行われる近代化は試行錯誤の連続であった。例えば、大砲を製



仙巖園に併設した「薩摩切子工場」では、斉彬が注力した薩摩切子の製造風景を見学可能。ギャラリーショップ「機工芸館」には、色とりどりに煌めく製品が並ぶ



豪から始まった西洋への眼差しは、斉彬へ、そして家臣である西郷隆盛や大久保利通らへと引き継がれていきます。現在、鹿児島市内の「明治日本の産業革命遺産」は観光名所にもなっていますが、訪れた際にはそうした日本の未来を思い描いた人々にも思いを馳せていただければ嬉しいですね。



水田用の水路として1691年に造られた疎水溝を斉彬が改修・延伸。取水口や堰の痕跡を見ることができる

### C 関吉の疎水溝

斉彬が進めた集成館事業は当初、水車を動力として利用していた。水力を安定的に得る為、「関吉の疎水溝」から仙巖園まで8kmに及ぶ水路をわずか8mの高低差を利用して築き上げる。溶鉱炉の火力を高める為のふいごや、鑄造した大砲の砲身に穴を開ける鑽開台でも水車動力が用いられた。

鹿児島市下町 1263 の先

### D 寺山炭窯跡

石炭を産出しない薩摩藩で、大砲やガラスの製造等に必要となる大量の燃料を得る為、斉彬は紀州熊野に藩士を派遣して製炭法を研究。木炭よりも火力・燃焼時間に優れた白炭の原料となるシイ・カシが群生し、冷却水も確保できる寺山に、1858年、炭窯を設けた。

鹿児島市吉野町 10710-68



令和5年11月現在、石積み崩落の為、周辺は立ち入り禁止に。一日も早い復旧が望まれる(写真協力：公益社団法人 鹿児島県観光連盟)

### B 旧鹿児島紡績所技師館(異人館)

忠義が日本初の洋式紡績工場を興した際に招いた英国人技師7名の宿舎として1867年に建てられ、「異人館」の通称で呼ばれた。コロニアル様式のペランダが特徴的な和洋折衷の建築様式で、建物は国の重要文化財、敷地は国の史跡に指定されている。

鹿児島市吉野町 9685-15 TEL 099-247-3401  
営 8:30 ~ 17:30 無休



幕末における西洋建築を伝える貴重な遺産でもある異人館。西南戦争の際には傷病者の救護施設として使用された



目に鮮やかな錫門と、重厚な正門が好対照を見せる。藩主になった気分で潜りたい



### 錫門・正門

薩摩藩内で産出する錫で屋根を葺いた「錫門」は江戸時代、藩主とその世継ぎのみ潜ることを許された正門であった。他方、現在の「正門」は斉彬の志を継いだ29代・忠義が1895年に建てたもの。島津家の紋である丸十紋や桐紋が彫られている。

### オリエンテーションセンター

正式名は「鹿児島 世界文化遺産オリエンテーションセンター」。館内では、薩摩藩の近代化を成し遂げた斉彬の施策や、1/10スケールの反射炉の模型を展示。内部の様子を見ることができ、その仕組みを分かりやすく紹介している。

館内では、薩摩藩の近代化の歩みを時系列で紹介。仙巖園の歴史の価値を改めて知ることができる



御殿から眺められるように設えられた鶴灯籠。巨岩の不思議な造形に目が引き付けられる

### 鶴灯籠

鶴が羽を伸ばしたような形から命名された。石炭ガスやガス灯の研究も進めた斉彬は、1857年には「鶴灯籠」でガス灯の点火実験に成功。日本初のガス灯として知られる。その後、城下町にガス灯を灯すことを思い描いたが、夢半ばにして亡くなった。

上/当時の様子を再現した謁見の間  
下/桜島を借景とした庭園。奥に見える四阿「望嶽楼」は、斉彬と勝海舟の会見の場となった

### 御殿

江戸時代は別邸として、忠義の代には一時本邸として生活の場となった。現在の建物は1884年に改築されたものが主体。鹿児島城によく似た造りで、建材には屋久杉の「節無し」の部分も多く用いられている。迎賓館として国内外の要人を招いた「謁見の間」は必見。庭園の向こうには雄大な桜島が変わらぬ姿で聳えている。



斉彬の死後もその志は二九代・忠義に引き継がれ、集成館は最盛期には千二百人の人々が働く、国内最大規模の近代工場群となる。明治十年(一八七七)、西南戦争で集成館の大半は焼失するが、集成館のDNAは新政府内の旧薩摩藩士たちが受け継ぎ、日本の近代化が進められていくのである。

造しようにも動力源となる蒸気機関はない。斉彬は集成館の8km先の「関吉の疎水溝」から水も漏らさぬ水路を造り上げ、水車で風を起こすことで溶鉱炉の火力を高めた。次に、溶鉱炉でできた銑鉄を大砲へと鑄造する為の「反射炉」で使用する熱源の問題が起こる。薩摩藩では西洋で用いられている石炭が産出しないのだ。斉彬は紀州藩に藩士を送り、代替品となる白炭の製法を研究。原木を千度の高温で焼成したのち、素灰をかけて急冷させた白炭は、製造に二週間ほどかかる。この跡地が「寺山炭窯跡」だ。分かるまで調べる、無ければ作る、成功するまで挑戦する。薩摩藩の近代化は、斉彬と藩士達の揺るがぬ信念が支えていたと言えるだろう。

斉彬は幕府や他藩の視察を受け入れ、また要請に応じて各地に技術者を派遣。

# 鹿児島県の恵み

島津家とのゆかりのあるつけあげや、世界からも注目を集めるかごしま黒豚に  
鹿児島黒牛。鹿児島を代表する名産を味わおう。



鹿児島県民の生活に根付いているつけあげ(さつまあげ)。現在は鹿児島土産の定番ともなり、様々な商品が販売されている(写真提供: いちき串木野市)

**つけあげ (さつまあげ)**  
市民の生活に根付き土産物としても人気の郷土料理

鹿児島で「つけあげ」と呼ばれているさつまあげ。江戸時代、島津家二八代当主の島津斉彬が諸藩に伝わるはんぺんやかまぼこにヒントを得て、高温多湿の気候に合わせ保存性を高めるために揚げ物にしたという説や、琉球料理の揚げかまぼこである「チキアギ」から生まれたという説がある。獲れすぎたアジやイワシなどを保存するために工夫した、生活の知恵の産物。おかずやおつまみ、さらには野菜炒めや卵とじの材料としても使われている。

**かごしま黒豚**  
世界でも高い評価を得る鹿児島ブランド

約四百年前に島津家家臣の島津家久が琉球から移入した豚をルーツとする。現在のかごしま黒豚は明治初期に英国のパークシャー種と掛け合わせ、さらに改良したものの。その中でも「鹿児島県黒豚生産者協議会」の会員が生産した黒豚を「かごしま黒豚」と称している。筋繊維が細くアミノ酸を多く含み、脂肪の融点が他の豚肉より高いため、歯切れが良く旨みと甘みに富んでいて、さっぱりしている。今では日本を代表するブランドとなり、世界的にも高い評価を得ている。



鹿児島を訪れたら第一に味わいたい「かごしま黒豚」。しゃぶしゃぶや豚カツ、角煮など、かごしま黒豚の特長を活かしたメニューが揃う(写真協力: 鹿児島市)



ステーキやしゃぶしゃぶ、せいろ蒸しなどで味わえば鹿児島黒牛の魅力が存分に感じられるだろう。贈り物に選ぶ人も多い(写真提供: 鹿児島県)

**鹿児島黒牛**  
食肉文化とともに生まれ全国一位に輝いたブランド牛

二〇二二年に開催された第十二回全国和牛能力共進会で、全九部門のうち六部門で一位を獲得し、内閣総理大臣賞も受賞した「鹿児島黒牛」。歴史は、食肉文化が始まった幕末から明治維新の頃に遡り、当時飼育されていた羽島牛、加世田牛、種子島牛に改良を重ねて誕生した。とろけるような食感で、程よく脂肪のつた霜降りから、旨みとまろやかなコクが溢れ出す。海外へは、「KAGOSHIMAWAGYU」の統一名称で輸出され、世界的にも注目を集めている。

## 薩摩藩の御用菓子として贈られた銘菓

鹿児島を代表する銘菓「軽羹」は元禄12年(1699)、島津家20代・綱貴の50歳の祝いの席で供されたというのが、最古の記録とされている。28代・斉彬は江戸から菓子職人を招き、味がよく栄養に富んだ保存食について研究させた。その結果、薩摩藩で採れる自然薯に、集成館事業の一環として改良・製造された米粉、白砂糖が合わさり、風味良く洗練された軽羹が誕生。軽羹は御用菓子として諸藩への進物に使われた他、冠婚葬祭に用いられる贈答菓子としても愛されるようになった。



純白の美しさと、ふんわり、もっちりとした食感が愛され続けている



厚い色ガラスを被せることで生まれるグラデーションは薩摩切子ならではの魅力

## 再び時を刻み始めた、斉彬の遺産

薩摩藩でのガラス製造は斉彬の父・斉興が弘化3年(1846)、化学薬品の研究製造に伴い、江戸から職人を招いて薬瓶を作らせたことに端を発する。斉彬はその技術を応用し、透明なガラスに色ガラスを被せ、薩摩切子を生み出す。美しい紅色は「薩摩の紅ガラス」として珍重された。だが、斉彬の死後、薩英戦争で工場は破壊。その後、一度は復活するも、明治10年(1877)の西南戦争で灰燼に帰した。長く途絶えた薩摩切子は島津家の末裔である島津興業により1985年に復活。宝石のような煌めきは、今再び国内外の人々を魅了し続けている。

## 洋式銃の研究から生まれた、新しい焼酎

鹿児島県を代表する酒・芋焼酎の誕生にも斉彬は一役買っている。斉彬が火縄銃に代わり目を付けたのは、衝撃で爆発する着火薬「雷汞」を用いた、雨天で発砲できる洋式銃。雷汞の原料となるエチルアルコールの製造に当初は米焼酎を用いていたが、薩摩藩に広がるシラス台地は稲作に適さず、米は貴重品であった。そこで斉彬は大量に栽培できる薩摩芋からのアルコール抽出を実現。火薬研究の過程で誕生した芋焼酎は、その後味味の改良が進められ、鹿児島の食卓に欠かせないものとなっている。



江戸時代より燗酒用に用いられてきた黒茶家(くるじょか)で、芋焼酎の味はよりまろやかに

# 斉彬ゆかりの鹿児島名物

これまで見てきた集成館事業だけでなく、現在鹿児島を代表する食文化や工芸品にも  
斉彬が関わっているものは多い。ここではその代表的なものを紹介しよう。